

論文

唐招提寺における平安時代後期の瓦生産について

岡田 雅彦ⁱ⁾

要旨 令和 5・6 年度 (2023・2024) におこなった唐招提寺旧境内の発掘調査において、瓦窯や灰原などの遺構を検出した。灰原から出土した瓦器碗の年代や同範瓦が出土した遺跡の年代、軒平瓦の顎形態から、おおよそ 11 C 後半～12 C 初頭に瓦を生産した窯であった可能性が高い。この年代は、中川実範によっておこなわれた永久 4 年 (1116) の伽藍修理よりも少し古い年代となる。

また、発掘調査で出土した瓦の同範関係を見ていくと、唐招提寺の中心伽藍での出土は少なく、薬師寺・興福寺・平等院・法勝寺など唐招提寺以外で多く出土している。つまりは、発掘調査で出土した瓦は、唐招提寺のために生産されたものではなく、他寺院へ供給することを主要な目的としていた可能性が高いことが明らかになった。

唐招提寺瓦屋は、伽藍が完成した弘仁元年 (810) 頃に解体しているため、平安時代後期において唐招提寺に瓦工は所属しておらず、他の寺院から瓦工が派遣されたと考えられる。これについては、薬師寺との同範瓦が創建当初から継続してあること、同範瓦が圧倒的に薬師寺で多いこと、創建当初から薬師寺僧が唐招提寺の運営に関わっていたことなどから、唐招提寺のすぐ南に位置している薬師寺から瓦工が派遣されて瓦生産をおこなったと考えた。

キーワード 唐招提寺、薬師寺、興福寺、平等院、法勝寺

I. はじめに

唐招提寺は、鑑真和上によって平城京右京五条二坊七・八・九・十・十五・十六坪に建立された寺院である (図 1)。天平勝宝 3 年 (759) に、没官地となっていた土地が鑑真和上に下賜され、唐招提寺が創建されることとなった。ただし、近年の調査などから金堂と講堂は長岡宮期以降に建立された可能性が指摘されている (奈良県教委文保所 2010・山崎 2003b)。また、東塔と金堂回廊は弘仁元年 (810) 以降に造営されていることから、鑑真和上に土地が下賜されてすぐに伽藍が完成したわけではないようである。

令和 5・6 年度 (2023・2024) に唐招提寺新宝蔵の東における発掘調査で、平安時代後期⁽¹⁾の瓦窯および灰原などが検出されただけでなく、瓦も多く出土した。瓦窯などの詳細についてはすでに報告したが、出土した瓦の詳細については報告することができなかった (岡田 2025)。

そこで本稿では、令和 5・6 年度 (2023・2024) の調査で出土した瓦の詳細について報告するとともに、唐招提寺における平安時代後期の瓦生産体制についてもあわ

せて検討していく。

II. 令和 5・6 年度 (2023・2024) 調査概要

(1) 遺構 (図 2)

発掘調査は、令和 5・6 年度 (2023・2024) の 2 ヶ年で 9 ヶ所のトレンチを設定しておこなった。調査地北側は、後世の削平などにより顕著な遺構は確認できなかった。しかし、調査地南側において、SY401・SX801・SY701・SK207・SK705 などの瓦窯に関する遺構が存在することが明らかになった。以下、これらについて簡単に報告する。

SY401 焚口・燃焼室・隔壁・焼成室を検出した。全長は 4 m 前後で、規模・形態は、御影堂下で確認された 8 C 後半の瓦窯に規模や焚口の構造などがよく似ている。焚口部に一部断割を入れた結果、御影堂下の瓦窯や奈良県庁北の登大路瓦窯と同様で、焚口の左右に石を門柱状に立て、その上に横方向の石を鳥居の笠木のように置く形態と考えられる (木村 2019、樞考研 2025)。南側は 12 C 末～13 C 初頭の土器を含む SX401 に切られる。

SX801 SY401 の西側で確認した灰原である。間層が 2 層確認出来ることから、少なくとも 3 回は操業してい

i) 樞原考古学研究所 おかだ まさひこ

た。上層からは、11 C 末～12 C 初めの瓦器碗が出土した。

SY701 SY401 よりも規模がやや小さいが、南東側で窯体が直立して円弧状に廻ることから窯と判断した。おそらくは燃焼室以外は削平されている可能性が高い。そして、SY701 の下層では SY401 の灰原である SX702 (SX801) を確認しており、SY401 よりも築窯時期は新しい。ただし、SY701 の灰原となる可能性が高い SK705 (SK207) から 11 C 後半の軒平瓦が出土していることを考慮すると同時期に操業していた可能性は否定できない。

小結 瓦窯や灰原の掘削を一部の断割でとどめたため、瓦窯や灰原から出土した瓦の数量は多くなく、大半の瓦は廃棄土坑や瓦窯廃絶後の包含層から出土している。ただし、後述するとおり、発掘調査で出土した瓦の大半が、唐招提寺の中心伽藍で出土が少ないものであることを考慮すると、ここで生産された瓦である蓋然性は高いと考える。そして、灰原である SX801 から 11 C 末～12 C 初頭の瓦器碗が出土したため、平安時代後期に操業していた瓦窯と考えられる。

(2) 出土瓦⁽²⁾

① 軒丸瓦 (図 3)

型式番号 001～499 は軒丸瓦 (奈良時代：001～149、平安時代以降の単弁：151～189、平安時代以降の複弁：191～229、その他の文様：231～249、巴文：251～369、文字銘：371～499) に割り振っている。

154 四葉宝相華文で、間弁はない。中房蓮子は 1 + 8 である。外区内縁には珠文帯があり、その内外に圏線を廻らす。瓦当側面はヨコナデ、瓦当裏面はナデが施される。

唐招提寺では新出で、薬師寺 86、興福寺 VI 丸 J1、大安寺 34A、平安宮真言院、平等院 NM043、法成寺 (奈文研 1987、藪中 1991、原田 2009、京都市文観局 1976、平等院 2003、福山・大塚 1968) と同範である。

166 単弁 (九弁か) で、間弁は棍棒状を呈する。外区内縁に珠文などはない。丸瓦部凸面と瓦当裏面から丸瓦部凹面にかけてはタテナデが施される。丸瓦広端部は無加工で丸瓦先端が凹面側に折れ曲がる。

唐招提寺では南面築地西端付近 (橋本 1988) で出土している。薬師寺宝積院 (山崎 2003b) と同範である。

191 複弁八弁で、間弁はない。中房蓮子は 1 + 6 で

ある。外区内縁には珠文帯があり、内側のみ圏線を廻らす。凸面はタテケズリ、凹面はナデが施される。丸瓦広端部は無加工である。

唐招提寺では新出で、現状では他の遺跡からも出土していない。

193 複弁八弁で、間弁はない。八花形に突出した中房に 1 + 8 の蓮子をおく。中房と複弁の間に蕊が表現されている。外区内縁は圏線が一本廻り、直立縁の外区外縁には 22 個の珠文を廻らせる。中房に糸切り痕跡が残る⁽³⁾。凸面は瓦当際および瓦当側面はヨコナデが、瓦当裏面は布または掌痕による押さえの後、ナデが施される。瓦当裏面周縁は丸瓦部から連続するナデが施される。瓦当裏面丸瓦接合位置には接合溝があり、丸瓦広端部は、凹面は無加工、凸面は不明である。

唐招提寺では出土品はないが寺蔵品 (奈文研 1987) がある。薬師寺 66、興福寺 VI 丸 E5、西大寺 67A、平安宮永寧堂、法勝寺、平等院 NM024B、最勝寺、白河街区 (奈文研 1987、藪中 1991、奈良県教委ほか 1990、京都市文観局 1976、上村 2025、平等院 2003、上村 2022、京都市埋文研 2018) と同範である⁽⁴⁾。

203 複弁で、間弁は T 字状を呈する。外区内縁には珠文帯があり、その内外に圏線に廻らす。外区外縁は直立縁となる。瓦当側面および瓦当裏面はナデが施される。

唐招提寺では新出である。現状では他の遺跡からも出土していない。平等院 NM020B (平等院 2003) に似る。

204 複弁で、間弁は楔形を呈する。外区内縁は圏線が廻り、外区外縁は内側の傾斜がなだらかな直立縁となる。中房付近が残るものがないが、蕊が廻る可能性がある。瓦当側面および瓦当裏面はナデが施される。瓦当は薄い粘土を重ねてつくる。

唐招提寺では新出で、現状では他の遺跡からも出土していない。大安寺 55A (原田 2009) に似る。

211 複弁八弁で間弁が棍棒状を呈する。複弁の子葉が一ヶ所のみ鍵手状を呈し、間弁の一本だけ先端にくりこみがある。中房蓮子は 1 + 6 である。外区内縁は珠文帯があり、内側にのみ界線がある。珠文間に×を一部のみに配置する。凸面はタテケズリ、瓦当側面はヨコナデ、瓦当裏面はケズリが施される。

唐招提寺では南面築地西端付近 (橋本 1988) で出土



図1 調査地位置図

『奈良県遺跡地図』5Cを改変

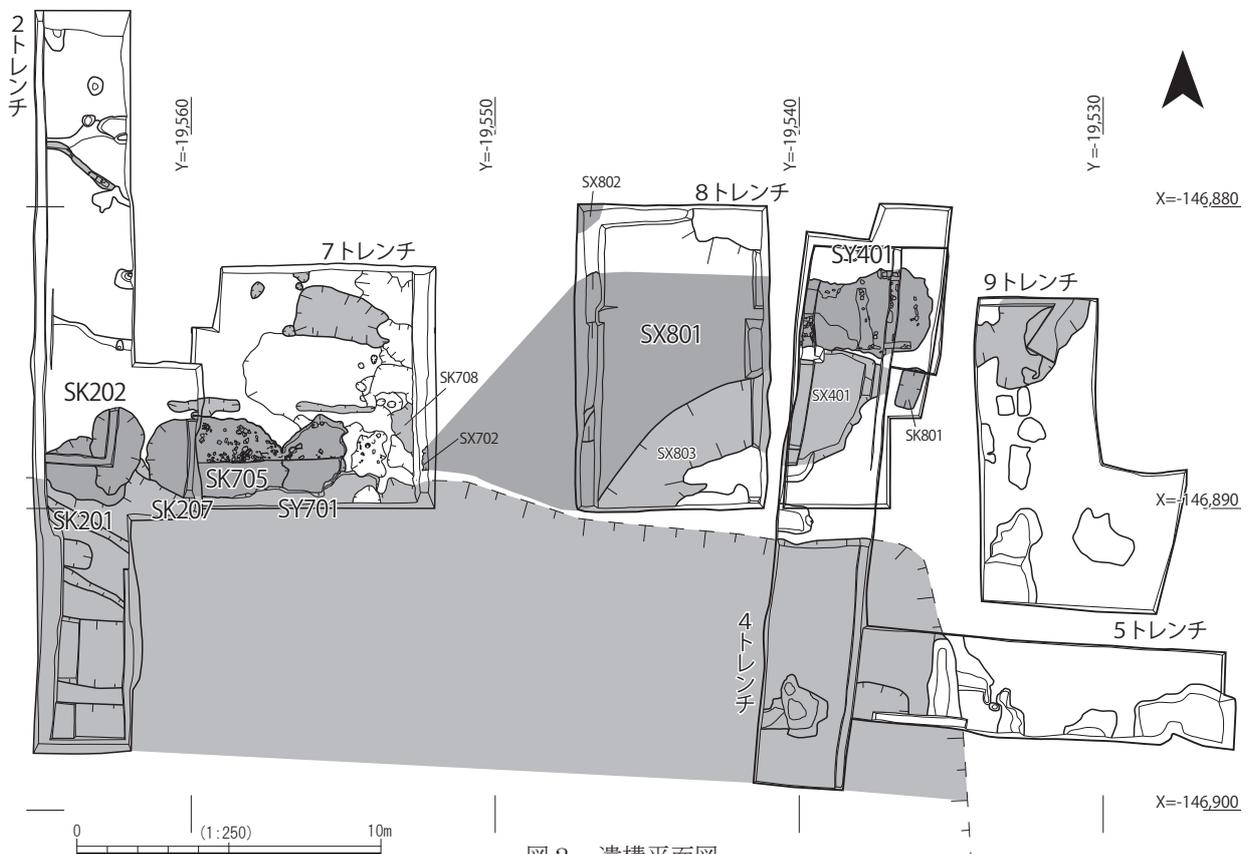


図2 遺構平面図

している。薬師寺 49・55、興福寺 V 丸 D5・VI 丸 D6、興福寺登大路瓦窯（奈文研 1987、藪中 1991・2000、樞考研 2025）と同範である。薬師寺 49 と興福寺 V 丸 D5 は、外区外縁珠文帯外側に圈線が廻る（図 4）。範傷進行から外区外縁珠文帯外側に圈線があり珠文間に×があるもの→外区外縁珠文帯外側に圈線がなく珠文間に×があるもの→外区外縁珠文帯外側に圈線がなく珠文間に×がないものと変遷していく可能性が高い⁽⁵⁾。

215 複弁で、間弁は棍棒状を呈する。外区内縁には珠文帯があり、内側のみ圈線を廻らす。調整は摩耗により不明である。

唐招提寺では新出である。現状では他の遺跡からも出土していない。興福寺観禅院（樞考研 2017）で出土したものに似る。

出土遺構 SK207 から 166・191 が、SK708 から 203 が、SY401 から 193 が、SX802 から 215 が出土した。

② 軒平瓦（図 5）

501～999 は軒平瓦（奈良時代：501～699、偏向唐草文 701～709、均整唐草文：711～739、蓮華文：741～769、半截菊花文：771～799、半截菱形・菱形文：801～819、宝珠文：821～839、三葉文：841～849、五葉文：851～859、その他の花文：861～899、巴・剣頭文：901～919、文字銘：921～929、その他：951～999）に割り振っている。なお、現段階が破片で文様構成がわからないものについては、仮分類として K1 から割り振っている。仮分類については、文様構成が分かるものが確認出来たら型式番号を割り振る予定にある。

538A 中心飾りが下向きで、唐草は左右に 3 回反転する。外区は珠文がなく界線が一本廻る。顎は曲線顎Ⅱで顎面および顎裏面から平瓦部にかけて丁寧なヨコナデが施される。凹面は瓦当際 2 cm にヨコケズリが施され、それより先は未調整で布目痕跡が残る。

唐招提寺にあるらしいが詳しい状況は不明（奈文研 2002）。薬師寺、山田寺、川原寺、伊予真導庵寺（山崎 2003b）などと同範である⁽⁶⁾。

701 左から右へ唐草が 8 回反転する。内区と外区の境の界線はない。顎は深い段顎で凹型成形台痕が残る。顎面から顎裏面はヨコナデが施される。凹面は瓦当際にヨコケズリが施される。

唐招提寺では 1988～1993 年度におこなわれた防災工

事に伴う発掘調査（以下、旧防災とする）（奈良県教委ほか 1995）で出土している。薬師寺 331（奈文研 1987）と同範である。平安時代末から鎌倉時代か。

705 左から右へ唐草が 6 回反転する。内区と外区の境の界線はない。薄い粘土を重ねて瓦当部をつくる。顎は浅い段顎で顎面はヨコケズリ、瓦当裏面はヨコナデが施される。

唐招提寺では新出で、興福寺 VI 平 A1、西大寺 264A、白河街区（藪中 1991、奈良県教委ほか 1990、京都市埋文研 2018）と同範である。

711 中心飾りが下向きで、唐草は左右に一回反転する。外区脇区には間隔の広い珠文を配置する。顎は同範事例から曲線顎Ⅱとなる可能性が高い。凹面瓦当際を幅の広いヨコナデが施され、それより先は未調整で布目痕跡が残る。

唐招提寺では旧防災（奈良県教委ほか 1995）で出土している。興福寺 III 平 C2、平城宮 7769、東大寺 337A、平安宮、山城国分寺（奈良県教委 2000、同志社大学歴史資料館 2010）と同範である。平安時代前期のものである。

715 中心飾りは上向きで、唐草は左右に二回反転する。外区と脇区にはやや大ぶりの珠文を配置する。顎は深い段顎で、顎面と顎裏面はヨコナデが、顎後縁に面取りが施される。

唐招提寺では旧防災（奈良県教委ほか 1995）で出土している。薬師寺 320（奈文研 1987）と同範である。鎌倉時代か。

725 中心飾りが蕾のような形で中に珠点をおく。その左右に連続する唐草を持ち、その間に珠点を置く。外区は珠文がなく界線が一本廻る。顎は段差をタテナデによりなだらかに仕上げるもので、凹凸とも摩耗により調整は不明である。

唐招提寺では新出で、興福寺 VI 平 B5、大安寺 215A、元興寺（藪中 2000、原田 2009、名古屋市博物館 2006）と同範である。

726 中心飾り状の文様が左右に反転する。外区は珠文がなく界線が一本廻る。顎は浅い段顎（726-1）、顎の段差をナデによりなだらかに仕上げるもの（726-2）、直線顎（726-3）がある。726-1 は瓦当貼り付け技法で顎面から顎裏面にヨコケズリ、平瓦部にタテケズリが、

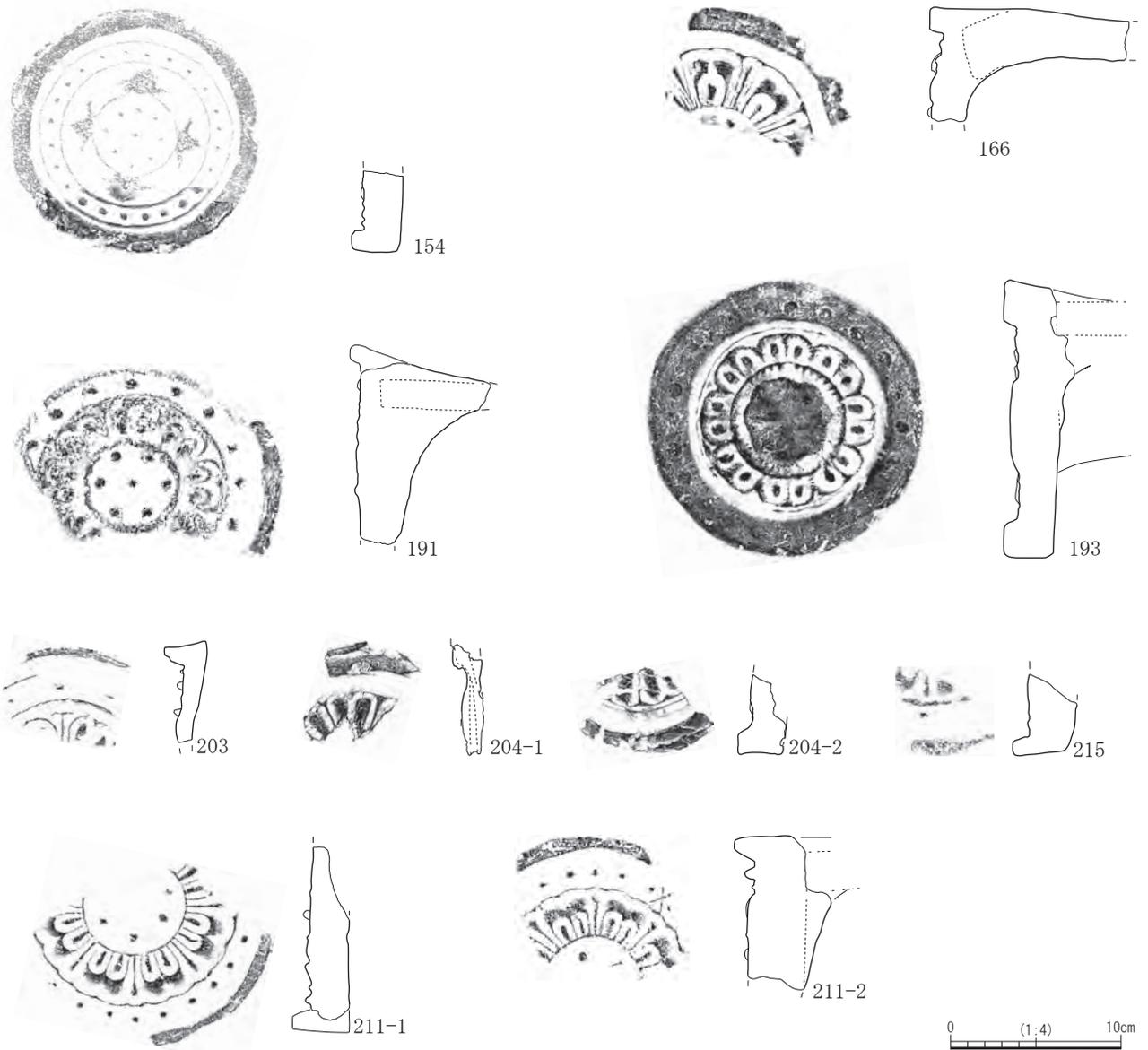
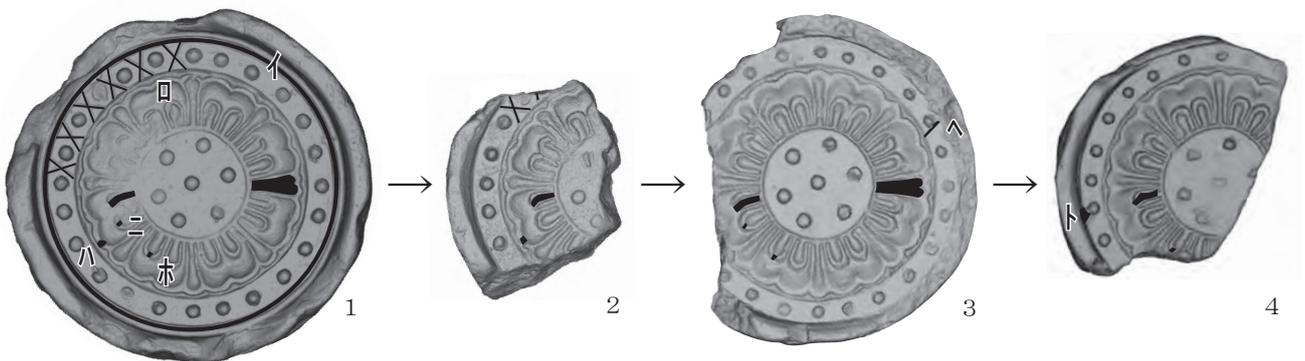


図3 出土軒丸瓦



	イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト
1	●	●	●	●	●	×	×
2	×	●	●	×	?	?	×
3	×	×	?	●	●	●	?
4	×	×	×	×	●	×	●

図4 軒丸瓦 211 範傷進行

726-2 は瓦当貼り付け技法で顎面から顎裏面にヨコケズリ後ナデ、平瓦部にタテケズリが、726-3 は顎面から平瓦部までタテケズリが施される。凹面調整は、726-1・2 は瓦当際をヨコケズリするが、726-3 は未調整で糸切り痕跡と布目痕跡が残る。

唐招提寺では新出で、興福寺VI平 I1、平安宮永寧堂（藪中 1991、京都市文観局 1976）と同範である。

729 中心飾りに達磨状の垂飾りを持つもので、唐草は左右に二回反転する。外区には珠文はなく、V字がめぐる。顎は浅い段顎で、瓦当貼り付け技法である。凹凸面の調整は摩耗により不明である。

唐招提寺では新出で、東大寺（平松 1998）と同範である。平等院NH029改（平等院 2000）とも同範であるが、本事例は改範されたものであり、改範前のものは、平等院で確認出来る。改範前は、外区と脇区に×と珠文を交互に配置するが、改範により×の半分と珠文がなくなる。

733 中心飾りが上向きで、唐草は左右に四回反転する。四単位目が範端で切れているが、現状で四単位目が切れていないものは確認出来ない。外区および脇区に界線および珠文はない。顎は直線顎で顎面から平瓦部にかけてはタテケズリまたはタテナデが、凹面は瓦当際をヨコケズリするが、それより先は未調整で糸切り痕跡と布目痕跡が残る。

唐招提寺では宝蔵解体修理で出土している（奈良県教委文保課 1972）。薬師寺 263、興福寺VI平 D2、橘寺、平安宮真言院、法勝寺、円勝寺、尊勝寺と同範である（奈文研 1987、藪中 1991、檀考研 1999、京都市文観局 1976、京都市埋文研 2015、伊藤・富井ほか 2021）。

734 中心飾りが下向きで、唐草は左右に三回反転する。外区に界線および珠文はない。顎は段差をタテナデによりなだらかに仕上げるものである。摩耗により調整は不明である。

唐招提寺では新出で、現状では他の遺跡からも出土していない。

K4 文様は唐草が左に展開する。外区に珠文を配置する。顎はやや深い段顎で、顎面から顎裏面にかけてヨコナデ、平瓦部にはタテケズリ後ナデが施される。凹面は瓦当際をヨコナデし、それより先は未調整で布目痕跡が残る。

K20 文様は唐草には見えず、偏向唐草か均整唐草文かはわからない。外区は珠文がなく界線が一本廻る。顎は浅い段顎で、顎面はヨコナデ、瓦当裏面から平瓦部にかけてはタテケズリが施される。凹面は未調整で糸切り痕跡と布目痕跡が残る。

唐招提寺では新出で、石清水八幡宮で採集されたものと同範である（星野 2000）。

K21 文様はよく分からない。顎は段差をナデによりなだらかに仕上げるもので、顎面はヨコナデ、瓦当裏面から平瓦部にかけてはタテケズリが施される。

出土遺構 SK207 から 538A・726・733 が、SK708 から 734 が、SX801 から K21 が出土した。

③ その他の瓦（図6）

今までの調査などで出土および採集された瓦の中で平安時代のものだけを抽出した。

151 単弁六弁で間弁はない。中房蓮子は1+6である。外区内縁に小粒の珠文を、その外側に輻線文をおく。他の瓦に比べて瓦当径が小さい。

唐招提寺では出土品はないが、寺蔵品（奈文研 1987）があり、薬師寺 76、平等院 NM007（奈文研 1987、平等院 2003）と同範である。

152 単弁八弁で間弁はV字状を呈する。八花形に突出した中房に1+4の蓮子を、中房の外側に蕊をおく。

唐招提寺では出土品はないが寺蔵品（奈文研 1987）があり、薬師寺 80（奈文研 1987）と同範である。

153 単弁六弁で間弁はない。六花形に突出した中房に1+6の蓮子をおく。外区外縁に珠文帯があり、その内外に圏線をおく。

唐招提寺では出土品はないが寺蔵品（奈文研 1987）があり、薬師寺 82（奈文研 1987）と同範である。

155 四葉宝相華文で、間弁は鳥翼状を呈する。中房蓮子は1+8である。外区外縁に珠文帯があり、その内外に圏線をおく。

唐招提寺では金堂解体修理（奈良県教委文保所 2010）で出土している。薬師寺 88・89、興福寺、今堤遺跡、法勝寺、平等院 NM041、円宗寺（奈文研 1987、興福寺 2002、木村 1937、上村 2022、平等院 2003、加納 1989）と同範である。

165 単弁で逆三角形の間弁をおく。中房の蓮子是不明。

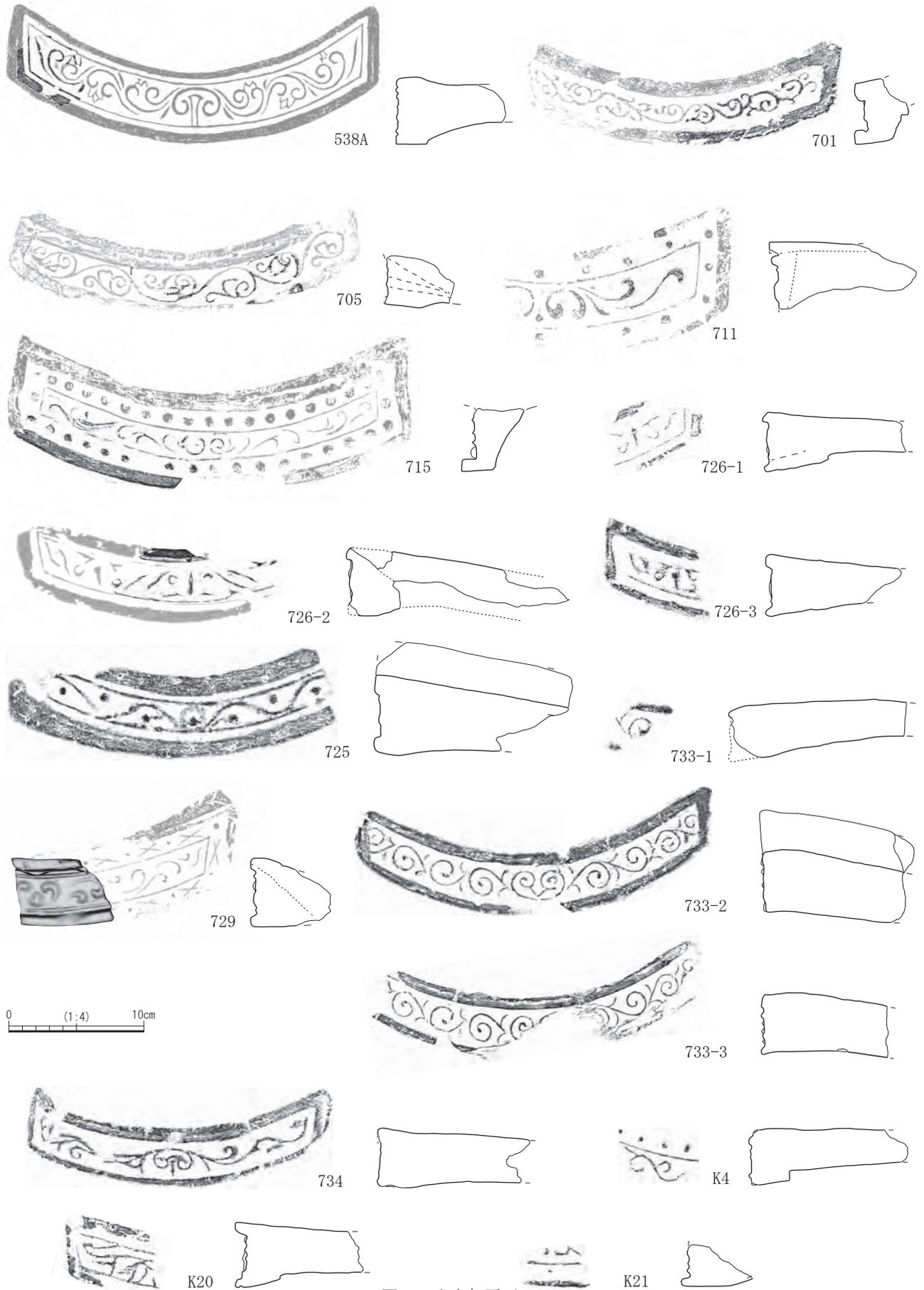


図5 出土軒平瓦

唐招提寺では2013～2015年度におこなわれた防災工事に伴う発掘調査（以下、新防災とする）（唐招提寺ほか2017）で出土している。薬師寺74（奈文研1987）と同範である。

168 四葉宝相華文である。中房には1+6の蓮子をおく。

唐招提寺では礼堂解体修理（国宝唐招提寺1941）で出土している。薬師寺87、大安寺34B、平等院NM042（奈文研1987、原田2009、平等院2003）と同範である。

192 複弁十三弁で間弁はない。中房には1+8の蓮子をおく。中央蓮子の外側に一条の圏線をおく。

唐招提寺では旧防災（奈良県教委ほか1995）で出土している。薬師寺53、大安寺46A（奈文研1987、原田2009）と同範である。平安時代中期か。

197 複弁で間弁はない。中房には蓮子がない可能性がある。

唐招提寺では新防災（唐招提寺ほか2017）で出土している。現状では他の遺跡からも出土していない。

202 複弁八弁で間弁は二本の線で表し、先端は圏線にとりつく。中房蓮子は1+6となる。外区外縁に珠文帯があり、その内外に圏線をおく。

唐招提寺では宝蔵解体修理（奈良県教文保課1972）で出土している。薬師寺39、大安寺39A、西大寺72A（奈文研1987、原田2009、奈良県教委ほか1990）と同範である。平安時代中期か。

722 中心飾りが下向きで唐草は左右に2回反転する。外区と脇区に二重の界線をおく。

唐招提寺では礼堂解体修理（国宝唐招提寺1941）で出土している。薬師寺267、興福寺VI平D5、平安宮真言院（奈文研1987、藪中1991、京都市文観局1976）と同範である。

723 中心飾りは下向きで垂飾りはY字形を呈する。外区と脇区に一重の界線をおく。

唐招提寺では旧防災（奈良県教委ほか1995）で出土している。薬師寺269、興福寺VI平C1、大安寺238A、西大寺276B、平等院NH023（奈文研1987、藪中1991、原田2009、奈良県教委ほか1990、平等院2003）と同範である。

945 梵字文である。

唐招提寺では南面築地西端付近（橋本1988）で出土している。薬師寺285、興福寺VI平K1、法勝寺（奈文研

1990、藪中1991、柏田2011）などとよく似ているが異範である。

953 宝相華文を左から右へ反転させたもの。

唐招提寺では旧防災（奈良県教委ほか1995）で出土している。興福寺VI平J1（藪中1991）と同範である。

K2 連続する右から左へ反転する唐草文で、外区と脇区に珠文をおく。

唐招提寺では旧防災（奈良県教委ほか1995）で出土している。

K3 連続する右から左へ反転する唐草文で、外区に珠文をおく。

唐招提寺では旧防災（奈良県教委ほか1995）で出土している。

K5 連続する左から右へ反転する唐草文の間に子葉をおく。外区と脇区に大粒の珠文をおく。

唐招提寺では旧防災（奈良県教委ほか1995）で出土している。

K6 連続する左から右へ反転する唐草文で、上外区のみ珠文をおく。

唐招提寺では旧防災（奈良県教委ほか1995）で出土している。

④ 小結

今まで唐招提寺で出土および採集されてきた瓦のうち、平安時代とされているものも含めて報告した。瓦窯およびその周辺から出土した瓦は、唐招提寺の中心伽藍で出土することが少なく、大和国では薬師寺・興福寺・大安寺、山城国では平等院・法勝寺など他の寺院で出土する（表1）。そして、報告した瓦のうち、軒丸瓦192・202、軒平瓦538A・701・711・715以外のものは、山崎氏の研究から平安時代後期に該当し、かつ、薬師寺瓦屋産の瓦である可能性が指摘されてきたものである（山崎2003b）。

III. 瓦の年代観

(1) 平安時代の唐招提寺

発掘調査において、灰原SX801から11C末～12C初めの瓦器碗が出土しており、これまでの年代観とは大きな齟齬はない。ただし、古い土器が新しい遺構に入り込むことはあり得ることであるため、唐招提寺および同範瓦が出土する他の遺跡においても、灰原SX801から出土

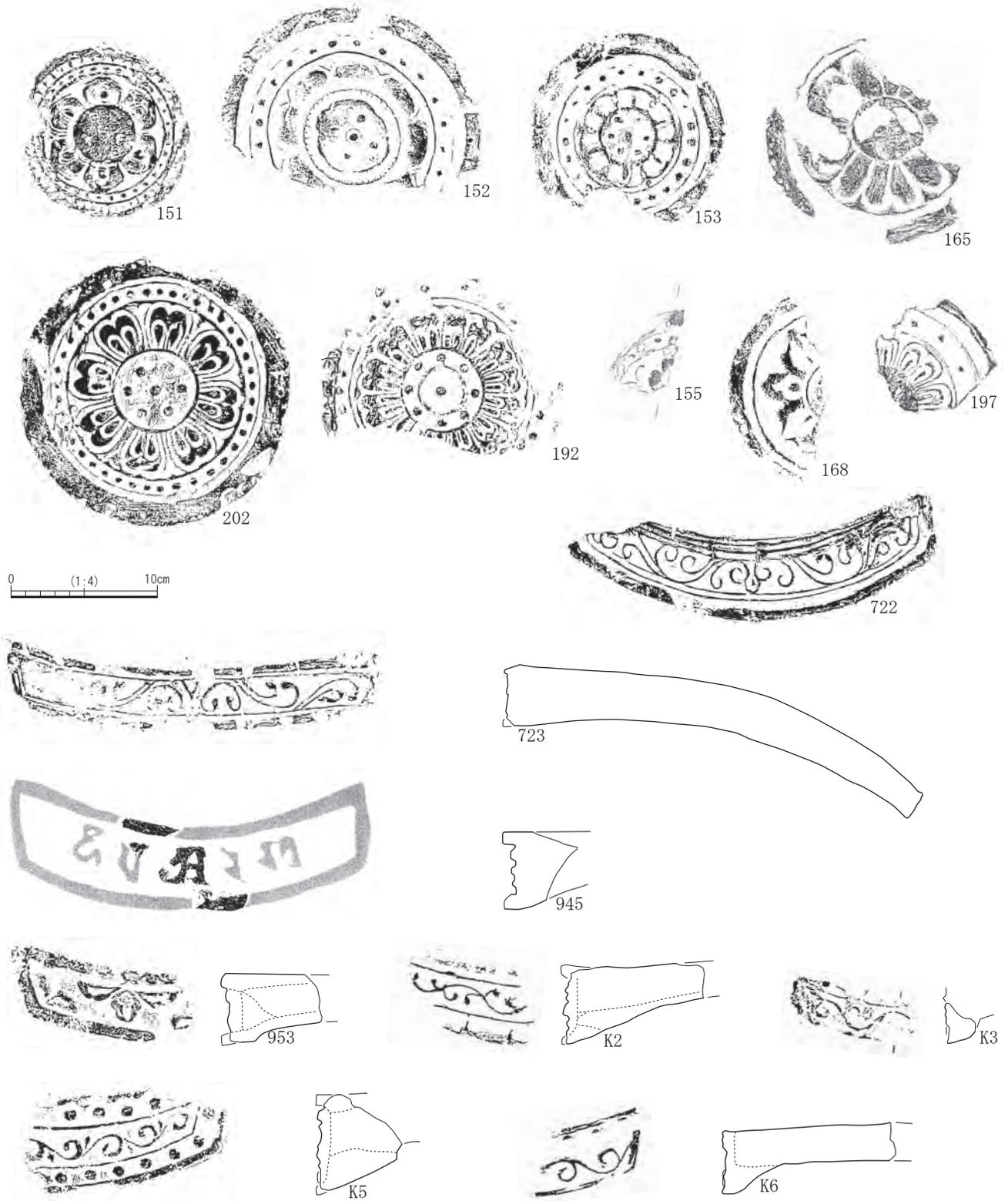


図6 既往の調査出土および採集された軒瓦



図7 顎分類

した瓦器椀の年代と近い年代となるのかを検証していく。

まずは唐招提寺の平安時代の状況についてみていきたい。唐招提寺は天平勝宝3年(759)に鑑真和上によって建立された寺院であるが、建立当初から現在のような伽藍が整備されていたわけではなく、段階を経て整備されていった。金堂の建立については、解体修理の際におこなわれた飛檐垂木の年輪年代から、天応元年(781)以降の建立であることが明らかになった(奈良県教委文保所2010)。講堂についても、従来言及されていた鑑真和上が亡くなる天平宝字7年(763)以前に建立されていた可能性は低く、長岡宮遷都以降に移築された可能性が指摘されている(山崎2003a)。金堂回廊および東塔は平城上皇によって弘仁元年(810)に建立されている。以上のことから唐招提寺の中心伽藍は、奈良時代末～平安時代初頭に建立されたことになる。

伽藍完成後の平安時代の様子は、あまり史料は残っていない。創建後、修理などに関係するものとして、『日本三代実録』貞観5年(863)に唐招提寺の修理料として新銭二十貫・鉄二十廷とある(黒板1944)。ただし、他の寺院も一斉に修理料をもらっていること、この時期の瓦が少ないことから、この年代に本当に修理がおこなわれたかについてはわからない。その後の修理状況を示すものはしばらくなく、『招提千載伝記』に記載される永久4年(1116)の中川実範の伽藍修理まで、修理に関する史料はない(関口・山本編2002)。「招提千載伝記」は、元禄14年(1701)のものではあるものの、金堂の解体修理において、飛檐垂木の年輪年代測定がおこなわれ、辺材はなかったが1062・1094・1099年の年代結果が出ていること(奈良県教委文保所2010)、講堂の解体修理において、地垂木に鎌倉時代の修理以前の修理痕跡が確認されていることから(奈良県文化財保護課1972)、『招提千載伝記』に記載される永久4年(1116)の伽藍修理は事実であった蓋然性は高いといえる。

以上のことから、唐招提寺では永久4年(1116)まで大きな修理はなかった可能性が高い。そして、この年代は灰原であるSX801から出土した瓦器椀の年代である11C末～12C初頭よりも少し新しく、年代に少し齟齬がある。

(2) 同範瓦出土遺跡

次に同範および同文瓦が出土する遺跡から年代をみていく。

① 大和国

薬師寺 天延元年(973)に金堂・東西両塔を除き、大部分が焼失している。翌年には講堂が再建された。中門は、寛和2年(986)、回廊は11C初め頃、食堂は寛弘3年(1006)、南大門は長和2年(1013)、十字廊は寛弘6年(1009)と再建には40年ほどかかっている。その後、東院に八角塔が長元元年(1028)～永承3年(1048)までに建てられた。これ以降の造営に関することを記載した史料はない(太田1979)。

中心伽藍内の調査で出土地点が報告されている瓦はないが、薬師寺北門の東にあった江戸時代初期に遡る子院宝積院の調査では、瓦の出土状況と併伴する遺物の報告がある。宝積院のあった地点は奈良・平安時代は苑院であったらしく、発掘調査によって埋土が上層と下層に分かれる池(以下SG20とする)が確認されている。そして、SG20の下には地山を切る土坑(以下、炭土坑とする)があった。以上のことから層位的には、炭土坑→SG20下層→SG20上層の順に新しくなる。なお、炭土坑からは軒丸瓦151・152・166・168、軒平瓦733とともに11C中葉～後葉の土器が、SG20下層からは軒丸瓦155、軒平瓦723・945(同文異範)のものとともに11C末～12C前半の土器が、SG20上層からは軒平瓦945(同文異範)のものとともに12C代の土器が出土している(山崎2003b)。

興福寺 寛仁元年(1017)に東金堂と塔が焼失したが、長元4年(1031)に再建供養がされている。永承元年(1046)に北円堂(但し永承4年(1049)焼失)と五重塔を除くほとんどの建物が焼失した。この再建は藤原氏主導のもと進められ、永承3年(1048)には中金堂と南円堂が再建された。これに近い時期に東金堂も再建されたと考えられている。その他の伽藍も少なくとも康平3年(1060)までには再建された。しかし、康平3年(1060)に、中金堂・南大門・中門・回廊・講堂・三面僧房・五重塔などが焼失した。治暦3年(1067)には中金堂と講堂、承暦2年(1078)に西金堂と五重塔の供養がおこなわれた。また、嘉保3年(1096)にも中金堂・南大門・中門・回廊・講堂・三面僧房に加えて鐘楼・経蔵が焼失したが、長治2年(1105)までに僧房以外が再建されたと考えら

表1 同范関係表

型式	大和						山城				
	唐招提寺	薬師寺	興福寺	大安寺	西大寺	その他	平安宮	平等院	法勝寺	円勝寺	その他
151	寺蔵品	76 11C中～後						NM007 1073以前			
152	寺蔵品	80 11C中～後									
153	寺蔵品	82									
154		86	VI丸J1	34A			真言院 1067	NM043 1073以前			法成寺 1079以前
155	金堂	88・89 11C末	○			今堤遺跡		NM041 1073以前	○ 1077		円宗寺 1070
165	新防災	74?									
166	1988調査	宝積院 11C中～後									
168	礼堂	87 11C中～後		34B				NM042 1073以前			
191											
192	旧防災	53		46A							
193	寺蔵品	66	VI丸E5? 1060～1078		67A		永寧堂 1072	NM024B 1073以前	○	○	白河街区
197	新防災										
202	宝蔵	39		39A	72A						
203								NM020B 1073以前			
204				55A							
211	1988調査	49 55	V丸D5 VI丸D6								
215			勸禅院								
538A	?	○				山田寺 川原寺					
701	旧防災	331									
705			VI平A1		264A						白河街区
711	旧防災		III平C2			平城宮7769 東大寺337A	○				山城 国分寺
715	旧防災	320									
722	礼堂	267	VI平D5 1060～1078				真言院 1067				
723	旧防災	269 11C末	VI平C1	238A	276B			NH023 1073以前			
725			VI平B5	215A		元興寺					
726			VI平I1 1060～1078				永寧堂 1072				
729						東大寺61次 1180以前		NH029改 11C中葉～ 1102			
733	宝蔵	263 11C中～後	VI平D2 1060～1078			橘寺	真言院 1067		○ 1077	○ 11C末～ 12C第3	尊勝寺 1129
734											
945	1998調査	285 12C	VI平K1						○ 1083		
953	旧防災		VI平J1?								
K2	旧防災										
K3	旧防災										
K4											
K5	旧防災										
K6	旧防災										
K20											石清水 八幡宮
K21											

太字 : 瓦窯およびその周辺から出土
太字斜体 : 同文異范
 : 同文

旧防災: 奈良県教委ほか1995
 新防災: 唐招提寺ほか2017

れている。そして、治承4年(1180)に東大寺と共に伽藍全体が焼失した(藪中1991)。

このように、中心伽藍が短期間で何度も焼失し、その都度再建されてきたために、永承元年(1046)・康平3年(1060)・嘉保3年(1096)のどの火災に伴う再建瓦であるかの判断が難しく、細かい年代を押さえることができない。その中で五重塔は、永承元年(1046)には焼失を免れたが康平3年(1060)には焼失し、承暦2年(1078)に供養された。その後、嘉保3年(1096)には焼失を免れ、治承4年(1180)に焼失した。つまり、五重塔周辺から出土した瓦は、焼失した康平3年(1060)から供養された承暦2年(1078)の間に製作された瓦である可能性が高いと言える。この五重塔周辺の瓦溜まりから出土し、五重塔の再建瓦の可能性が高いものとして、軒丸瓦 193、軒平瓦 722・726・733がある(興福寺1978)。

大安寺 寛仁元年(1017)の火災で金堂・講堂・食堂などの中心伽藍が焼失した。金堂については長元2年(1029)までに再建された。再建にともなう造大安寺長官の補任は長暦2年(1038)までであり、この段階には大半の再建が完了したが長久2年(1041)に焼失している。金堂については、永承2年(1047)までに再建されている⁽⁷⁾。承保3年(1076)宝殿・三重塔焼失、寛治4年(1090)には講堂と南大門以外の建物が再建されている。講堂は承徳2年(1098)に再建された可能性があり、鐘楼と経蔵は康和3年(1101)～永久4年(1116)の間に再建された。軒丸瓦 154・168・192・202、軒平瓦 723・725が該当する(原田2009)。

東大寺 寛弘5年(1008)に尊勝院が、長元4年(1031)に薬師院が、天喜元年(1053)に天地院が焼失するが、治承4年(1180)まで伽藍全体が焼失するような火災は確認できない。また、修理は定期的にあるようだが、大規模な修理は『東南院文書』によると天喜4年(1056)～康平元年(1058)におこなわれた(東京帝国大学1944)。この時の修理には瓦屋も含まれており、『東大寺文書』によると東大寺の瓦屋は「西東瓦屋」と呼ばれていたようである(竹内1963b)。

出土状況が分かるものとしては、大仏殿中門南西に位置する東大寺第61次調査があり、改範後の軒平瓦 729がSD04と暗灰色粘砂から出土している。前者は12C末

～13C中頃の土器が供伴し、後者は治承4年(1180)の火災後の廃棄層と評価されている(平松1998)。

② 山城国

平安宮真言院 真言院は、豊楽院の北、内裏の西に位置している。空海によって承和元年(834)に設置された。治暦3年(1067)に真言院が新造され、安元3年(1177)焼失後は再建されなかった(上村2007)。

瓦溜りから軒丸瓦 154、軒平瓦 722・733が出土している(京都市文観局1976)。

平安宮永寧堂 天喜6年(1058)に焼失し、延久4年(1072)に再建された(上村2007)。

瓦溜りから軒丸瓦 193、軒平瓦 726が出土している(京都市文観局1976)。

平等院 藤原頼通によって、永承7年(1052)に建立された。本堂は永承7年(1052)に、鳳凰堂は天喜元年(1053)に、阿弥陀堂は天喜4年(1056)に、多宝塔は康平4年(1061)に、五大堂は治暦2年(1066)に、不動堂は延久5年(1073)に供養がおこなわれた。承暦4年(1080)頃に小御所が建立され、康和3年(1101)には平等院全体の修理がされている(浜中2024)。

鳳凰堂の修理に伴う調査および周辺の調査から、鳳凰堂周辺では河内向山系軒瓦が多く出土しているが、南都系、中央官衙系も出土している。河内向山系は、平等院では承暦4年(1080)頃に造営された小御所のものが最初で、鳳凰堂のものは小御所よりも新しくなる文様である。康和3年(1101)の醍醐太知院の創建瓦に近いことなどから、12C前半台の年代が与えられている。そのため、創建期については当初は木瓦の可能性が指摘されてきた。しかし近年は、南都系瓦で焼成前に分割された隅軒平瓦が出土したことなどから創建当初から瓦葺きであり、南都系と中央官衙系の瓦が葺かれていたと考えられるようになった。平等院では、承暦4年(1080)頃には河内向山系軒瓦が主体的になっていくことから、南都系の瓦は頼通が亡くなる延久6年(1074)まで供給を受けていたとされている。この時の瓦は軒丸瓦 151・154・155・168・193・203、軒平瓦 723が該当すると考えられる(杉本1999・浜岡2024・平等院2003)。

また、鳳凰堂以外の地点においても南都系瓦が集中して出土する地点がある。その地点は境内南側(F区)で、

表2 年表

和暦	西暦	大和	山城
貞観五	863	唐招提寺：修理科（新銭二十貫・鉄二十疋）	
天延元	973	薬師寺：金堂・東西両塔以外焼失	
寛和二	986	薬師寺：中門再建	
長保五	1003	興福寺：観音院大堂建立	
寛弘元	1004	東大寺：東塔修理	
寛弘二	1005	東大寺：東薬門修理	
寛弘三	1006	薬師寺：食堂再建	
寛弘四	1007	東大寺：大仏殿裳階修理	
寛弘五	1008	東大寺：尊勝院焼失	
寛弘六	1009	薬師寺：十字廊建立、東大寺：東塔修理	
長和二	1013	薬師寺：南大門再建	
寛仁元	1017	興福寺：五重塔・東金堂・地藏堂焼失 大安寺：金堂・講堂・食堂など焼失	
寛仁二	1018	大安寺：造大安寺長官を定める	
寛仁四	1020		法成寺：無量寿院阿弥陀堂・十斎堂供養
治安元	1021	東大寺：三昧堂供養	法成寺：無量寿院西北堂供養、これまでに経蔵
治安二	1022		法成寺：無量寿院金堂・五大堂供養
治安三	1023	東大寺：千手堂（銀堂）修理	
万寿元	1024		法成寺：薬師堂供養
万寿三	1026		法成寺：阿弥陀堂供養
万寿四	1027		法成寺：釈迦堂供養
長元元	1028	薬師寺：ここから1048年までに塔院八角塔建立	
長元二	1029	大安寺：これまでに金堂再建	
長元四	1031	興福寺：五重塔・東金堂供養 東大寺：西院建立、勅封蔵修理、薬師院焼失	
長元八	1035	東大寺：尊勝院建立	
長暦二	1038	大安寺：造大安寺長官廃止	
長久二	1041	大安寺：焼失	
永承元	1046	興福寺：北円堂と五重塔以外焼失	
永承二	1047	大安寺：これまでに金堂瓦葺き	
永承三	1048	興福寺：中金堂・南円堂再建（東金堂もか）、東大寺：小塔院修理	
永承四	1049	興福寺：北円堂焼失	
永承五	1050		法成寺：新堂（講堂）供養
天喜元	1053	東大寺：天地院焼失	平等院：鳳凰堂供養
天喜四	1056	東大寺：康平元年（1058）まで伽藍全体の修理	平等院：阿弥陀堂供養
天喜六	1058		法成寺：焼失、平安宮朝堂院永寧堂：焼失
康平二	1059		法成寺：阿弥陀堂・五大堂供養
康平三	1060	興福寺：主要伽藍焼失	
康平四	1061		平等院：多宝塔供養、法成寺：東北院供養
治暦元	1065		法成寺：金堂・薬師堂・観音堂供養
治暦二	1066		平等院：五大堂供養
治暦三	1067	興福寺：中金堂・講堂供養	平安宮真言院：新造
延久二	1070		円宗寺：金堂・講堂・法華堂建立・供養
延久三	1071		円宗寺：常行堂・灌頂堂建立
延久四	1072		平安宮永寧堂：再建
延久五	1073		平等院：不動堂供養
承保三	1076	大安寺：宝殿・三重塔焼失	
承暦元	1077		法勝寺：金堂・講堂・阿弥陀堂など主要伽藍落慶供養
承暦二	1078	興福寺：西金堂・五重塔供養	
承暦三	1079	興福寺：食堂転倒、東大寺：千手院・勅封蔵修・食堂修理	法成寺：東西二塔・講堂・十斎堂・法華堂・釈迦堂供養
承暦四	1080		平等院：この頃小御所建立
永保三	1083		法勝寺：薬師堂・八角堂。塔落慶供養
応徳二	1085		法勝寺：常行堂供養
寛治二	1088	興福寺：東堂焼失	
寛治四	1090	大安寺：講堂と南大安寺門以外再建	
嘉保三	1096	興福寺：中心伽藍焼失	
永長元	1096	薬師寺：地震で回廊転倒	
承徳二	1098	大安寺：講堂再建か	法勝寺：九重塔修造、再供養
康和三	1101	大安寺：1116年までに鐘樓・経蔵再建	平等院：伽藍全体修理
康和四	1102		尊勝寺：金堂・講堂・東西塔・観音堂・五大堂・門など供養
康和五	1103	興福寺：再建供養	
長治二	1105	興福寺：これまでに僧房以外再建か	尊勝寺：阿弥陀堂供養
天仁二	1109		法勝寺：北斗曼荼羅堂供養
永久四	1116	興福寺：春日西塔建立、唐招提寺：伽藍修理	
元永元	1118		最勝寺：塔・金堂・薬師堂門など供養
保安三	1122		法勝寺：小塔院供養
天治元	1124	興福寺：大湯屋焼失、同年作事・東円堂建立。	
大治元	1126		円勝寺：三重塔供養
大治三	1128		円勝寺：五大堂供養
大治四	1129	興福寺：大湯屋焼失、東大寺：伽藍全体修理	尊勝寺：御堂供養、最勝寺：五大堂焼失
大治五	1130	興福寺：大湯屋再建	尊勝寺：五大堂再建、円勝寺：御堂供養
保延四	1138	興福寺：三重塔上棟	
保延六	1140	興福寺：春日東塔建立供養	
康治二	1143	興福寺：三重塔建立	
安元三	1177		平安宮真言院：焼失（再建されず）
治承四	1180	興福寺・東大寺：焼失	

凝灰岩廃棄土坑 SX30 が検出されており、凝灰岩とともに南都系または中央官衙系の瓦が出土している。ここからは、改範前と改範後の軒平瓦 729 が出土しており、供伴する土師器は 11 C 中葉～12 C 初頭頃までのものである（平等院 2000）。

法成寺 藤原道長によって寛仁 3 年（1019）に建立され、長元 3 年（1030）の東北院まで継続して造営に関する記事がある。永承 5 年（1050）に講堂、天喜 5 年（1057）に八角円堂が建立されたあと、天喜 6 年（1058）に焼失した。康平 2 年（1059）から再建され、承暦 2 年（1078）までには主要建物は再建された（清水 1986）。

南大門の西において軒丸瓦 154 が出土している（福山・大塚 1968）。

法勝寺 承保 2 年（1075）に造営が開始され、承暦元年（1077）に金堂・講堂・阿弥陀堂など主要伽藍の落慶法要がなされている。塔と薬師堂は主要伽藍よりやや遅れて永保元年（1081）から建立されており、永保 3 年（1083）に供養がされている。応徳 2 年（1085）に常行堂が、天仁 2 年（1109）に北斗曼荼羅堂が、保安 3 年（1122）に小塔院が供養されている（柏田 2011）。

永保 3 年（1083）に供養された塔周辺からは軒平瓦 945 と同文異範の梵字文軒平瓦が多く出土しており、これが塔所用の瓦であると考えられている（柏田 2011）。

元永元年（1118）に塔・金堂・薬師堂・門等が供養された（京都市 2018）最勝寺跡の発掘調査において、軒丸瓦 155・193 が出土している。調査地は、推定最勝寺東部で南北道路を挟んで法勝寺の西端に接する地点であり、法勝寺で不要となり廃棄された瓦と評価されている（上村 2022）。

円宗寺 後三条天皇により仁和寺の南に建立された。延久 2 年（1070）に金堂・講堂・法華堂が建立され供養がされた。延久 3 年（1071）に常行堂・灌頂堂が建立された（平岡 1978）。

発掘調査は平安時代の遺物包含層から軒丸瓦 155 が出土している（加納 1989）。

尊勝寺 康和 4 年（1102）に金堂・講堂・東西塔・観音堂・五大堂・門などが、長治 2 年（1105）に阿弥陀堂が、大治 4 年（1129）に御堂が供養されている（平岡 1979）。

尊勝寺内からは唐招提寺同範の瓦は出土していない。しかし、久安 5 年（1149）に金堂や塔などを供養されて

いる延勝寺跡における京都大学の調査では、整地に伴い周辺から集められて集中的に廃棄された瓦が出土している。この瓦の様相が尊勝寺比定地出土瓦と似るとの指摘がある。軒平瓦 733 が黒色粘質土（第 6 層）から出土し、12 C 後葉～13 C 前葉の土師器が供伴する（伊藤・富井ほか 2021）。

円勝寺 大治元年（1126）に三重塔が、大治 2 年（1127）に五重塔と西塔が、大治 3 年（1128）に五大堂が、大治 5 年（1130）に御堂が供養された（京都市埋文研 2015）。

昭和 45 年（1970）に調査された円勝寺跡から出土した瓦については、上原氏は法勝寺の瓦であると評価している（上原 1987）。ここからは、軒丸瓦 193 と軒平瓦 733 が出土している（円勝寺発掘調査団 1972・上村 2025）。

京都市埋蔵文化財研究所による円勝寺跡の発掘調査によると、11 C 末～12 C 第 3 四半期の土器が供伴する二条大路末と寺域を区画する施設に関する遺構と考えられている溝 628 から軒平瓦 733 が出土している（京都市埋文研 2015）。

白河街区 京都市埋蔵文化財研究所による白河街区の発掘調査で 13 C から 14 C の土器とともに軒丸瓦 193 と軒平瓦 705 が出土している。遺跡の性格としては白河周辺の寺院全体の維持管理や再整備に関わる施設群が置かれた場所と考えられている（京都市埋文研 2018）。

（3）軒平瓦の顎形態から推定される時代

平安時代後期の南都の瓦は、軒平瓦の顎形態から年代が推定されている。続けてこれを検討していく。南都の平安時代後期における軒平瓦の顎形態については、上原氏と山崎氏による見解がある。

上原氏の見解 京都に搬入された瓦から南都の瓦を 2 つに分けた。古段階（11 C 後半～12 C 前葉）は平瓦部が厚手で段顎を有するものが主体となるが、新段階（12 C 前半～中葉）では薄手の平瓦部から瓦当に向けて緩やかに厚みを増すものが主体となると指摘した（上原 1978）。年代については、後に古段階を永承年間～承暦元年（1077）、新段階は大治 5 年（1130）～治承 4 年（1180）に変更している（上原 1987）。

山崎氏の見解 薬師寺宝積院出土瓦から顎部と平瓦部との段差が 1.5cm 前後の段顎を「顎 I」、顎部と平瓦部

との段差が0.5cm前後の段顎を「顎Ⅱ」、0.2～0.3cmほどの段差があるがこの段差をナデによりなだらかに仕上げたものを「顎Ⅲ」と3つに分けた(図7)。そして、遺構の切り合い関係から炭土坑→SG20下層→SG20上層と層位的に新しくなること、顎分類を層位で検討した結果、炭土坑からは顎Ⅰ、SG20下層からは顎Ⅱ、SG20上層からは顎Ⅲが出土することから、顎Ⅰ→顎Ⅱ→顎Ⅲに変遷する可能性を指摘した。また、范傷が増えるにつれて顎Ⅰ→顎Ⅱ、顎Ⅰ→顎Ⅱ→顎Ⅲに変遷する事例もあることから、層位的な検討の裏付けとする。年代は顎Ⅰ＝平安時代後期Ⅰ(1040～1067年)、顎Ⅱ＝平安時代後期Ⅱ(1067～1090年)、顎Ⅲ＝平安時代後期Ⅲ(1090～1180年)とした(山崎2003b)。

しかし2011年には、興福寺と薬師寺の軒平瓦は治暦3年(1067)～寛治4年(1090)頃にかけて段顎から曲線顎に変化していると、2003bの研究と異なる見解を述べている(山崎2011)。つまりは、前稿よりも顎Ⅲが生産される年代を古くした。ただし、なぜ年代を古くしたかについての根拠の記載がない。山崎氏が論文で検討している瓦から読み取ると、治暦3年(1067)に新造された平安宮真言院から顎Ⅲの733が、延久4年(1072)再建の平安宮永寧堂から顎Ⅲの726が出土している(京都市文観局1976)。山崎氏は、これらの瓦を薬師寺瓦屋産としており、この年代観から顎Ⅲの年代を古くしたのであろう⁽⁸⁾。

顎Ⅲの時期 結局のところ、顎Ⅲだけが生産される時期はいつ頃になるのだろうか。顎Ⅲだけが採用される事例は法勝寺塔と法金剛院がある。法勝寺塔は永保3年(1083)に供養されている。そして、創建軒平瓦に薬師寺同范や同文異范の梵字文が採用されており、これらは全て顎Ⅲである(柏田2011)。ただし、塔以外では顎Ⅲ以外が確認できる。一方、大治5年(1130)に建立された法金剛院からは、興福寺と同范の軒平瓦などが多く出土している。これらはいずれも顎Ⅲである(藪中1991・山崎2011)。そして、大治5年(1130)～治承4年(1180)の年代観が与えられている法金剛院と同范瓦を含む興福寺Ⅶ期の瓦に顎Ⅰ・Ⅱはない(藪中2000)。

以上の事から、すでに指摘されているが顎Ⅰ・Ⅱが確認出来なくなるのは、法金剛院の大治5年(1130)以降とするのが現状では最も矛盾がない。唐招提寺では顎Ⅱ

と顎Ⅲが出土していることから、大治5年(1130)以前と考えられる。

(4) 小結

同范瓦出土遺跡の検討から瓦の年代は、主に11C中頃～12C初頭にかけての各寺院における再建・建立に伴って使用された瓦であると位置づけられる。軒平瓦も顎ⅡとⅢの両方が確認できることから、唐招提寺の灰原から出土した11C末～12C初頭の瓦器碗の年代とも整合しており、唐招提寺で伽藍修理がおこなわれる永久4年(1116)よりも少し古い年代を示している。

以上のことから、瓦窯およびその周辺から出土した平安時代後期の瓦は、中心伽藍からの出土も少なく修理年代とも一致しないため、唐招提寺で使用するために作られた瓦ではない可能性が高い。

IV. 平安時代後期の瓦生産

最後になぜ唐招提寺において他の寺院の瓦が生産されるようになったのかについて検討したい。

唐招提寺では、境内北側に位置する御影堂下で検出された瓦窯において、創建伽藍に使用する唐招提寺式軒瓦の生産をおこなっていたと考えられる(木村2019)。しかし、弘仁元年(810)頃に金堂回廊と東塔が完成したことにより唐招提寺では伽藍整備が完了し、不要となった唐招提寺式軒瓦の瓦範は丹波国分寺瓦屋に移動して唐招提寺に戻ってくることはなかった。また、丹波国分寺で使用された唐招提寺式軒瓦は、唐招提寺と異なる製作技法で生産されているため、唐招提寺瓦屋の瓦工は丹波国分寺瓦屋へは行っていない(清野2005、岡田2023)。そして、弘仁元年(810)以降の平安時代前期および中期に造営の記事がなく、瓦の出土も少ないことから、伽藍整備の完了とともに唐招提寺の瓦屋は解体し、瓦工は他の南都の瓦屋に移動した可能性がある。つまりは、平安時代後期の段階で唐招提寺には瓦工は所属していなかったため、どこからか瓦工が派遣されたということになる。

ところで、薬師寺・東大寺・大安寺・法隆寺などの南都の寺院はどうであろうか。これらの寺院は唐招提寺と異なり、平安時代以降も瓦屋は解体されていない。平安時代前期・中期の瓦は、南都の寺院間で同范関係が少な

く、各自の瓦屋で必要な分の瓦を生産していたようだが（奈文研 2024）、平安時代後期は同範が目立つようになる。この理由については、永承元年（1046）に焼失した興福寺の復興記録である『造興福寺記』（史料 1）などが参考になる。

『造興福寺記』（史料 1）によると、永承元年（1046）以降の興福寺の再建は各国に造営を分担させる方式をとった。そして分担国は、分担国で生産した瓦を興福寺に搬入しようとしたがそれはさせてもらえず、南都の瓦屋で瓦を生産することとなり、分担国は瓦生産に必要な費用を出すこととなった。南都瓦屋は、永承 2 年（1047）の段階で東大寺二所、元興寺一所、大安寺一所、薬師寺二所、法隆寺二所があったようである。このうち、興福寺一所、元興寺一所、薬師寺一所、法隆寺二所の瓦屋を修造させた。しかし、これらの瓦屋全てで瓦生産を進めたのではなく、最終的には法隆寺・薬師寺・興福寺・鳥居瓦屋で瓦を作り、興福寺の伽藍を再建している⁹⁾（小林 1964・仏書刊行会 1915・山崎 2011）。このように興福寺の復興を契機に、他の寺院の瓦屋にも瓦を作らせて供給させる手法が、一部の寺院で利用されるようになった。

また、瓦を交易している事例が東大寺と仁和寺にある。大治元年（1126）「東大寺三綱申文」「……近者仁和寺焼失、忽營造之間、偏於南都交易瓦、併以件住人所令運上仁和寺也、……」と記載があり、仁和寺が焼失した元永 2 年（1119）に東大寺から交易により瓦を運ばせている（東京帝国大学 1944）。これにより、他の寺院の瓦屋が生産した瓦を購入することがあったことも判明する。

以上の事から、平安時代後期の唐招提寺において、どこからか瓦工が派遣され、他の寺院に瓦を供給するための瓦屋が新たに設置された可能性は考えられないだろうか。これについては、創建時から瓦の同範が最も多い薬師寺が関係している可能性を指摘できる。薬師寺は、永承年間の興福寺再建以降、薬師寺と同範の瓦が山城国で多く見られるようになっており、このことについて山崎氏は、「永承 2 年の興福寺再興に際し造瓦に賞を賜ったことが契機となって、これ以後、薬師寺瓦屋は大和の造瓦を代表する瓦屋として脚光を浴びるようになったのであろう。」と評価する（山崎 2011・史料 1）。つまりは、薬師寺から瓦を供給してもらう寺院が増えたことによ

り、薬師寺は瓦屋の生産能力を補う必要が生じたと考えられる。そこで、薬師寺の北に隣接する唐招提寺に瓦生産の一部を委託した可能性が考えられる。

薬師寺と唐招提寺の関係性については、唐招提寺建立当初から見て取れる。『招提寺建立縁起』には、「……西南僧房一字、右薬師寺惠元大法師造立如件……」とあり、伽藍整備時において薬師寺僧惠元が西南僧房を建立している（藤田 1972）。また、唐招提寺式軒平瓦が薬師寺で出土していることも、唐招提寺創建当初から薬師寺と関係があったようにみえる¹⁰⁾（奈文研 1987）。伽藍完成後も薬師寺の天延元年（973）の伽藍焼失の際の再建瓦である軒丸瓦 192・202 が唐招提寺で使用されている。また、建治 3 年（1277）の『薬師寺大唐院主実性所領譲状案』には「……薬師寺招提両寺檢校兼大唐院々主権僧正（在判）「実性」（裏書）」とあり（永島 1986）、建長 7 年（1255）～建治 3 年（1277）まで薬師寺別当であった実性が薬師寺と唐招提寺の檢校を兼ねていたことがわかる（京都府 1990・末柄 2004）。そして、中世後期の事例ではあるものの、唐招提寺が薬師寺寺辺郷の中に位置すること、唐招提寺の檢断権が薬師寺にあること、薬師寺から唐招提寺へ継続的に出向する僧がいることなどから、宗派は異なるが寺院運営の一部を薬師寺が担っていたことが指摘されている（及川 2004）。

こうした関係性から、瓦を増産しないといけない薬師寺から唐招提寺へ瓦工が派遣され、その瓦工により唐招提寺瓦屋が運営され、他の寺院へ供給するための瓦生産がおこなわれた蓋然性は高いと考える。

V. まとめ

本稿では、令和 5・6 年度（2023・2024）に出土した平安時代後期の瓦について検討してきた。これらの瓦は、薬師寺、興福寺などといった南都の寺院に加え、平等院や法勝寺など山城国の寺院との同範関係が認められた。そして、これらの同範瓦が出土した寺院は、11 C 中頃～12 C 初頭頃の再建や建立に関連する年代のものが多く、灰原 SX801 から出土した瓦器碗の年代である 11 C 末～12 C 初頭とも整合的である。しかし、永久 4 年（1116）の唐招提寺における修理年代よりも古い時期を示していることから、唐招提寺に必要な瓦を生産していたわけではないということになる。そして、唐招提寺

では弘仁元年（810）頃の伽藍完成後に瓦屋は解体しており、平安時代後期に瓦を作る工人はいなかったため、どこからか瓦工が派遣されたことになる。

大和国や山城国では、永承年間の興福寺の再建を契機に、他の寺院の瓦屋に瓦の生産を委託する事例が増え、東大寺と仁和寺のように寺院間で瓦の交易もおこなわれるようになっていったようである。そして南都では、薬師寺が永承の興福寺再建以降、大和を代表する瓦屋となったことで、他の寺院への瓦の供給量が増加することに対応する必要が生じた。そのため、薬師寺は創建以来関係が深かった唐招提寺に瓦生産の一部を委託することで対応しようとしたのではないかと本稿では結論づけた。

史料1 『造興福寺記』（仏書刊行会 1915）

※瓦に関する部分だけを抜き出した。下線部は本稿において関係する部分である。

永承二年二月

- ・「十二日丁巳。……奏下之左大臣宣依請。即令下知。又可借進瓦屋之由。給宣旨於寺寺矣。〈東大寺二所。元興寺一所。大安寺一所。薬師寺二所。法隆寺二所〉」
- ・「十三日戊午。天晴。左大臣召左少弁藤原朝臣（某）。被仰云。金堂瓦。諸国各於本国。欲造焼之由（云々）。定不同与。南京諸寺。各有瓦屋。召料物於彼国。招集所所瓦工等。於行事所。令作之如何。先可令支度可葺彼堂之瓦。枚数造焼之間。単功并人夫等者。奉仰即召遣南京葺瓦者并作工等了。□人夫□給宣旨召之。〈山城二百人。大和二百人。河内二百人。伊賀二百人。〉」
- ・「十七日壬戌。天霽。南京造瓦工。□□□并葺工（本寺工）等參上。先召葺瓦工。問可葺金堂之瓦□。□□□云。金堂上作丈尺。暗以難申。知彼丈尺之後。可□□也。但以十万枚許。可被葺与。大安寺以七万余千枚葺之（云々）。至于茲寺金堂者。依□□層。所加申□者。又召焼瓦工。間造焼之間作法。并単功等。申云。取□□土以夫七人七日夜間。打調之後造之。遲者一年。速者三月干之。干畢後一竈乃中。積立千二百枚。〈二百枚者損料〉以松木百斤。七箇日夜焼之。件瓦宛如堅石。単功除夫之外。一竈料廿石者。任口状注勘文。覽左大臣仰云。件料米。早支配七箇国。可召之仍給 宣旨。〈近江。播磨。各三百石。丹波。美作。伊予。讃岐。備中。各二百八十石。已上二千石。〉」

- ・「此日。……又仰大和国。令修造所所瓦屋。〈興福寺一所。元興寺一所。薬師寺一所。法隆寺二所。〉」
- ・「二十一日丙寅。天陰雨降。召瓦屋料歛於産国。〈備前。備中。備後。出雲。伯耆。美作。各十五口。〉」
- ・「此日巳刻。立瓦屋於春日鳥居南頭。〈十間二面屋三字。五間二面屋四字。是仰当国。所令造立也。〉先日古老云。伝聞。春日野南岸。有旧瓦窯跡。是則造東大寺講堂時。官行事所。於此処。令造焼瓦（云々）者。造寺長官以下。臨其所。徵雇人夫。試令掘之間。已得五ヶ所瓦窯誠知。冥感之至矣。仍且修補瓦窯之破損。且令立造瓦之屋也。又召二寸半板八十枚。於伊賀国作土船等（云々）」
- ・「八月壬午。天晴。此日巳刻。造始金堂料瓦□（屋）□□□法隆寺薬師寺本寺并鳥居等瓦屋。〈各□□□□□様〉後召。瓦工令給酒肴□（禄）等。」
- ・「廿五日己亥。……申刻許。長官以下。向鳥居瓦屋。催行瓦事。臨昏黒各退出。」
三月
- ・「二十九日癸卯。天晴。別当権少僧都真範。長官藤原朝臣資仲。相共向薬師寺。実檢瓦屋事所造之瓦。甚以華麗。可謂神妙。召工等賜少禄。次向法隆寺。同濫（臨力）知。頗致疎略。仍召工長貞空法師。加譴責。臨乘燭。各帰宿所。」
五月
- ・「五日己卯。天晴。法隆寺瓦工等。参行事所申云。国役繁多。凡（凡か瓦か不詳）事殆停滞者。則随各暇名。可免除臨時雜役之由。給宣旨於大和国。」
- ・「廿七日辛丑。天晴。下宣旨於大和国。召曾木板三千枚。〈依土産也。〉為充瓦屋用途也。……」
六月
- ・「十七日庚申。天晴。此日瓦所夫不足。仍下知山城大和河内等国。召瓦所夫。不足夫六百人。〈各二百人。〉依左大臣宣也。」
九月
- ・「廿五日丙申。……運進供御氷負駄參拾四疋未進在大和国以彼駄欲令運法隆寺造進瓦者。左小弁藤原朝臣資仲申此由。左大臣仰云。任□□（早）□可令催運者。著□部□□□（等遣之）」
永承三年正月
- ・「廿二日辛卯。天晴。依造瓦所申請。下知大和国。召夫百人。」

・「二十九日戊戌。……葺始金堂等瓦。〈先是。已二点作土。〉」

閏正月

「二十日己未。……近日口鑿穴湛水。欲□用瓦□□料之处。聊有涌水、従底溢□□□□□。誠雌令□□。更不得見其底。穴深不過二□□□□□〈在講堂乾西室第一間東一許丈。方三尺許。〉仰数日炎旱。寺辺之水。悉以□□。仍汲佐保川充種々用之間。已有此水。仏法靈巖。堪以炳焉。」

謝辞

本稿作成に当たり、上村和直氏、植山茂氏、大脇潔氏、鈴木久史氏、原田憲二郎氏、藪中五百樹氏から数多くのご助言をいただきました。特に上村氏と植山氏には京都との同範瓦についてご教授いただきました。また、平安宮真言院・永寧堂、円勝寺出土瓦との同範確認については、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課および新田和央氏に格別の配慮を賜りました。記して御礼申し上げます。

註

- (1) 平安時代の年代区分については、山崎 2003b の区分を使用している。平安時代前期：794～910年、平安時代中期：910～1040年、平安時代後期：1040～1180年
- (2) 文様の表現については奈文研 1987 に準拠した。
- (3) 同範である寺藏品と円勝寺出土瓦にも同様に瓦当面に糸切り痕跡が残る。円勝寺出土瓦については、2024年3月19日に京都市伏見区水垂収蔵庫において確認した。
- (4) 軒丸瓦 193 には同文異範のものがあり、外区外縁の珠文や蕊の数が 193 より多い。これは薬師寺、興福寺、平安宮真言院、平等院、法成寺と同範である。なお、真言院のものは、193 のような糸切り痕跡は確認出来ないが、瓦全体に指紋が目立つ。これについては、2024年3月19日に京都市伏見区水垂収蔵庫において確認した。
- (5) 但し、4 は範傷「ハ」が確認出来ないことから一番古く、2 で×を、1 で圏線を追刻した可能性もある。この場合、1・2 に範傷「ト」が見られない事の説明がつかない。
- (6) 軒平瓦 538A は、山田寺跡東面回廊の倒壊瓦の中から出土しており、倒壊直前まで葺かれていた。東面回廊の倒壊時期は 11 C 前半と考えられており、それ以前に葺かれていたこ

とから、平安時代後期以前の可能性が高い(奈文研 2002)。

- (7) 『造興福寺記』(史料 1) には、永承元年(1046)に焼失した中金堂再建の際に、新たに作る必要がある瓦の枚数について、興福寺の葺工に確認したところ、大安寺の金堂の事例を答えているため(仏書刊行会 1915)、大安寺の金堂はこの時までには再建されていたと考えられる。
- (8) 田中氏は、炭土坑から顎Ⅱが、SG20 下層から顎Ⅲが出土していたことを指摘している(田中 2025)。このことも、山崎氏が当初の見解を変更した理由の一つだろうか。
- (9) 東大寺二所、元興寺一所、大安寺一所は最終的に瓦を生産していない(史料 1)。東大寺は天喜 4 年(1056)から大修理が開始される(東京帝国大学 1944)。元興寺は長元 8 年(1035)「東大寺三綱堂損色検録帳」に建物がかかり修理を必要としている状況が記録されている(東京帝国大学 1944・奈良県文化財保存課 1957)。大安寺は長久 2 年(1041)火災により焼失している。東大寺・元興寺・大安寺は大規模な修理中または修理予定であり、興福寺の瓦を焼く余裕はなかったため、候補から外れたのではないだろうか。
- (10) 『奈良市史』には、豊安が一時薬師寺に止住していたと記載されているが、どの史料に基づく記述であるのか引用がなく不明である(奈良市史編纂審議会 1994)。豊安は、如宝から引き継いで唐招提寺伽藍整備を完成させた高僧であり、豊安と薬師寺に関係があったとすれば、より薬師寺と唐招提寺の関係性は深かったことが指摘できる。

引用・参考文献

- 伊藤淳史・富井眞ほか 2021 「京都市白河街区跡・延勝寺跡・岡崎遺跡の発掘調査Ⅱ」『京都大学構内遺跡調査研究年報』2019 年度 京都大学大学院文学研究科附属文化遺産額・人文知連携センター 京大文化遺産調査活用部門
- 上原真人 1978 「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14 1978 春の号 財団法人元興寺文化財研究所
- 上原真人 1982 「平安後期の軒瓦に関する基礎的研究」『考古学論考 小林行雄博士古希記念論文集』小林行雄博士古希記念論文集刊行委員会編
- 上原真人 1987 「瀬戸内海を渡ってきた瓦」『大阪湾をめぐる文化の流れ—もの・ひと・みち—』帝塚山考古学研究所
- 上村和直 2007 「平安宮の衰微」『研究紀要』第 10 号 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
- 上村和直 2022 「《資料紹介》最勝寺推定地出土瓦の再検討」『洛

- 史 研究紀要』第13号 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
- 上村和直 2025 「円勝寺推定地出土瓦の再検討」『帝塚山大学考古学研究所研究報告』X X VII 帝塚山大学考古学研究所
- 円勝寺発掘調査団 1972 「円勝寺の発掘調査（下）」『仏教芸術』84 毎日新聞社
- 及川亘 2004 「戦国期の薬師寺と唐招提寺」『寺院・検断・徳政 戦国時代の寺院史料を読む』山川出版社
- 太田博太郎 1979 『南都七大寺の歴史と年表』岩波書店
- 岡田雅彦 2023 「唐招提寺の瓦」『第22回シンポジウム 奈良末～平安初期の軒瓦 発表要旨』奈良文化財研究所
- 岡田雅彦 2025 「史跡 唐招提寺旧境内」『奈良県遺跡調査概報』2024年度（第一分冊）奈良県立橿原考古学研究所
- 柏田有香 2011 「法勝寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告』平成22年度 京都市文化市民局
- 加納敬二 1989 「13 円宗寺跡」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
- 木村捷三郎 1937 「王寺出土の古瓦」『大和王寺文化史論』
- 木村理恵 2019 「史跡唐招提寺旧境内発掘調査（重要文化財旧一乗院宸殿ほか1棟建造物保存修理事業に伴う平成29年度調査）」『奈良県遺跡調査概報』2017年度（第二分冊）奈良県立橿原考古学研究所
- 京都市文化観光局文化財保護課 1976 『京都市埋蔵文化財年次報告－1975』
- 京都市埋蔵文化財研究所 2015 『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2014-13
- 京都市埋蔵文化財研究所 2018 『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2017-16
- 京都府立総合資料館 1990 『資料館紀要』18
- 黒板勝美 1944 『日本三代実録 新 増補3版』国史大系 第四卷 大八州出版創立事務所
- 興福寺 1978 『興福寺防災施設工事・発掘調査報告書』
- 興福寺 2002 『興福寺 第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報IV』
- 国宝唐招提寺礼堂修理事務所編 1941 『国宝唐招提寺礼堂修理工事報告書』
- 小林行雄 1964 『続古代の技術』塙書房
- 清水擴 1986 「法成寺の伽藍とその性格」『日本建築学会計画系論文報告集』第363号 日本建築学会
- 末柄豊 2004 「中世における薬師寺別当織の相承について」『寺院・検断・徳政 戦国時代の寺院史料を読む』山川出版社
- 杉本宏 1999 「平等院造営の特質－鳳凰堂の南都系瓦と興福寺再建をめぐる」『瓦衣千年－森郁夫先生還暦記念論文集』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会
- 清野孝之 2005 「何が動いたのか－唐招提寺金堂創建軒瓦および同範瓦の再検討－」『待兼山考古学論集－都出比呂志先生退官記念－』大阪大学考古学研究室
- 関口静雄・山本博也編 2002 『招提千載伝記』唐招提寺・律宗戒学院叢書 第一輯 昭和女子大学近代文化研究
- 竹内理三 1963a 『平安遺文』古文書編 第三卷 東京堂
- 竹内理三 1963b 『平安遺文』古文書編 第五卷 東京堂
- 田中龍一 2025 「A 薬師寺の瓦」『平安時代後期の軒瓦 発表要旨』古代瓦研究会第24回シンポジウム 奈良文化財研究所
- 東京帝国大学文学部史料編纂所編 1944 『大日本古文書』家分け十八ノ一
- 同志社大学歴史資料館 2010 『南山城の古代寺院』同志社大学歴史資料館調査研究報告第9集
- 唐招提寺・奈良県立橿原考古学研究所 2017 『史跡唐招提寺旧境内』－緊急防災施設改修事業に伴う発掘調査報告書 唐招提寺
- 永島福太郎編集校訂 1986 『春日大社文書』第六卷 春日大社名古屋博物館 2006 『名古屋博物館収蔵 大和古瓦図版目録』名古屋博物館資料図版目録7
- 奈良県立橿原考古学研究所 1999 『橘寺』奈良県文化財調査報告書第80集
- 奈良県立橿原考古学研究所 2017 『名勝奈良公園・興福寺跡』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第122冊
- 奈良県立橿原考古学研究所 2025 『登大路瓦窯跡・興福寺旧境内』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第130冊
- 奈良県教育委員会編 2000 『東大寺防災施設工事・発掘調査報告書』東大寺
- 奈良県教育委員会・財建築研究協会編 1995 『唐招提寺防災施設・発掘調査報告書』唐招提寺
- 奈良県教育委員会・奈良国立文化財研究所 1990 『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』西大寺
- 奈良県教育委員会文化財保存課 1972 『唐招提寺宝蔵及び経蔵修理工事報告書』

奈良県教育委員会事務局文化財保存事務所 2010『国宝唐招提寺金堂修理工事報告書』奈良県教育委員会

奈良県文化財保存課 1957『元興寺極楽坊本堂・禅室及び東門修理工事報告書』

奈良県文化財保存事務所編 1972『国宝唐招提寺講堂他二棟修理工事報告書』奈良県教育委員会

奈良国立文化財研究所 1987『薬師寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第 45 冊

奈良市史編集審議会編 1994『奈良市史 通史 2』奈良市

奈良文化財研究所 2002『山田寺跡発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第 63 冊

奈良文化財研究所 2024『古代瓦研究会第 23 回シンポジウム 奈良時代前・中期の軒瓦 発表要旨』

奈良六大寺大観刊行会 1969『唐招提寺一』奈良六大寺大観第十二巻 岩波書店

橋本裕行 1988「唐招提寺発掘調査報告」『奈良県遺跡調査概報』1987 年度（第二分冊）奈良県立橿原考古学研究所

原田憲二郎 2009「大安寺旧境内から出土した平安時代以降の軒瓦」『奈良市埋蔵文化財調査年報』平成 18（2006）年度 奈良市教育委員会

浜岡邦弘 2024「頼通とその一門の考古学的検討－平等院・氏を中心に－」『日本史研究』746 日本史研究会

平等院 2000『平等院 境内発掘調査報告書』

平等院 2003『史跡及び名勝 平等院庭園保存整備報告書』

平岡定海 1978「四円寺考」『古代史論叢』下巻 井上光貞博士還暦記念会編 吉川弘文館

平岡定海 1979「六勝寺の成立について」『大手前女子大学論集』13 大手前女子大学

平松良雄 1998「史跡東大寺旧境内・名勝奈良公園－平成 9 年度発掘調査概報 III. 第 61 次調査の概要」『奈良県遺跡調査概報』1997 年度 奈良県立橿原考古学研究所

福山敏男・大塚ひろみ 1968「法成寺の古瓦」『仏教芸術』68 毎日新聞社

藤田経世 1972『校刊美術史料 寺院篇 上巻』中央公論美術出版

仏書刊行会 1915『大日本仏教全書 興福寺叢書 第一』

法隆寺昭和資材帳編集委員会 1992『法隆寺の至宝』第 15 巻

星野猷二 2000『塩澤家蔵瓦図録』伏見城研究会

藪中五百樹 1991「平安時代に於ける興福寺の造営と瓦」『仏教芸術』194 毎日新聞社

藪中五百樹 2000「奈良～平安時代の興福寺の新形式瓦」『帝塚山大学考古学研究所報告』II 帝塚山大学考古学研究所

山崎信二 1980「大和における平安時代の瓦生産」『奈良国立文化財研究所学報』第 38 冊 研究論集 VI 奈良国立文化財研究所

山崎信二 2003a「七 唐招提寺 5 創建の時期について」『奈良の寺－世界遺産を歩く－』岩波新書

山崎信二 2003b「大和における平安時代の瓦生産（再論）」『古代瓦と横穴式石室の研究』同成社

山崎信二 2011『古代造瓦史－東アジアと日本－』雄山閣

図出典

図 1 岡田 2025 を転載。

図 2 岡田 2025 を一部加工して転載。

図 3 岡田 2025 を一部加工して転載。154 の下図は原田 2009 の拓本を転載。

図 4 筆者作成。1・3 は登大路瓦窯出土のもの（橿原研 2025）、2・4 は図 3-211-1・211-2。

図 5 729 は筆者が作成。その他は岡田 2025 を一部加工して転載。538A の下図は奈文研 2002、701・715 の下図は奈文研 1987、705 の下図は山崎 2003b、711 の下図は同志社大学歴史資料館 2011、726-2 の下図は京都市文観局 1976、729 の下図は平等院 2000 の拓本を転載。

図 6 151・152・153・168・202・722 は奈文研 1987、155 は奈良県教委文化保存所 2010、165・197 は唐招提寺ほか 2017、192・723・953・K2・K3・K5・K6 は奈良県教委ほか 1995、945 は橋本 1988 の拓本を転載、断面図は再トレースした。

図 7 山崎 2003b を再トレースして転載。